

竹中さん

「同じ思いで一緒にやっつけていこうとする仲間がどんどん増えていきます。おそらくこれまでから、ここに住む人たちは、どうにかしないと、という思いは持っておられたと思います。ただ、そのきっかけがなかっただけ。自分たちが暮らしている場所が寂れていくのを、ただ見ているだけはいつらいですから。嬉しいのは地元の若い人も何人か一緒にやってくれていること。みんな、やったらできることが実感できたと思います。日常に戻った今でも、町家に以前とは違う何かものすごいチカラが感じられます。ただ、大事なものは継続させること。無理をせず、背伸びをしすぎず、できることをやっつけていくことです。今後は、夏には七夕、秋にはお月見など四季折々の風物詩を町家で感じられる『その本陣』を続けていきたいと思っています。それから、いつでも人が集い、癒やしやくつろぎを味わえる場所として常設的な施設ができればと考えています」

その一翼を担う竹中さんは、ご夫婦で町家に刻まれた歴史と人情を守り続けようと、温かいまなざしでじっと町並みを見つめておられました。

集う

今こそ、田舎の良さを

「なんかね、田舎の元気がなくなって、人と人とのつながりが細くなってきていると思うんです」

日吉町上胡麻で『郷の家』を立ち上げた金子成龍さん（左の写真）。地域の人々が気軽に集まったり、語りあえる場所を作りたいという思いで、木をたくさん使った温かみのある施設を自ら建築。周りの敷地内には、野菜畑や果樹園が広がっています。

金子さん

「昔は近所の人と顔を合わせる機会がもつとあったように思います。それが今は少なくなっていて、地域が疎遠になっている。この田舎が『不便なところ』だと、若者は都市部へ出て行ってしまいます。しかし、田舎には田舎の良さがちゃんとあります。採れたて新鮮な野菜が一番おいしい状態で安心して食べられるし、四季の自然を感じることもできる。ぜひいたくなことです」

平成19年には、京都府の地域力再生プロジェクト支援事業交付金を活用し、『郷の家』に陶芸窯と炭焼き窯を設置されました。仲間や近隣の方呼びかけ、毎週水曜日には陶芸教室を開催し、竹炭作りも始められました。

炭焼きにする竹や木は、近隣の民家周辺で群生して困っているという所へ出向いて、メンバーで間伐したものを利用。地元の方には大変喜ばれ、環境保全にも一役買っています。

金子さん

「いや、私はど素人ですよ。府民の森ひよしで炭焼きをされているので、そこへ行って教わったり、陶芸の先生に来てもらったり。独学でも勉強しますが、失敗もたくさん繰り返しています。それでも、二つと同じものができない楽しさがあります。この『郷の家』は常に開放しているのも、もっと気軽に近所の方々に来てもらいたいと思っています。陶芸をしたり、お茶をのんで話をしたり、いろんなことに活用してもらったら



▼『郷の家』と炭焼き窯（左下）

嬉しいんです。年に何回か、地域の親子や都市部の家族、仲間呼びかけて交流イベントもやっています。野菜を収穫したり、もちをついたり、郷土料理を食べながら、みんなワイワイがやがや。そんな様子を見ているのは楽しいものです」

畑にまかれた野菜の種のように、『郷の家』にも交流の花が咲き、たくさんの実りがどんどん収穫できることでしょう。

金子さん

「小さなことから地道に。いずれ地域に恩返しができるように」

近所の人々や子どもたちでにぎわう日を楽しみに、日焼けした顔に優しいしわを集めて畑で精を出す金子さんの姿がありました。